

## Chaucer, *The Pardoner's Tale* における老人

斎藤 勇

Pardoner 自身が巡礼の仲間に向って、「方々拙僧はこういう風に説教するのです」 (...sires, thus I preche) [VI, 915]<sup>1</sup> というからには彼のする話はひとつの説教であるだろうし,<sup>2</sup> 三人のならず者 (riotoures) についての話は説教説話 (例話) である。だからそこにひとつの教訓が据えられる。話の概略はこうだ。三人の酔っぱらった若いならず者が自分たちのかつての仲間の一人を攫っていった<死>を求めて酒場を出発する。途中一人の老人に出会って<死>の居場所を教えてもらう。教えられた場所に彼等は金貨の山を発見する。三人のうち一人が町にワインを買いに走り、瓶に毒をしこむ。残りの二人はこの男の殺害を画策し、計画通り殺すが、自分たちも毒入りワインを飲んで死ぬ。<sup>3</sup> そこでこの老人とは何者ぞや、という問題が浮びあがる。以下はこの老人についての試論である。

### I

まずこの老人の登場を説教のコンテキストに沿って分析してみたい。Pardoner は自分の話の前口上で、我輩の説教のテーマはいつも同じである、と揚言している。すなわち “*Radix malorum est Cupiditas.*” (金銭の欲は、すべての悪の根です) (1テモ, 6:10) (VI, 334)である。<sup>4</sup> *Cupiditas* というのが Augustinus の言うように、単なる金銭欲だけではなく、過度に欲望されるすべてのことがらとのかかわりで理解されねばならないとしても,<sup>5</sup> 三人のならず者の話は *Cupiditas* を戒める例話である。彼等は *Cupiditas* の体具者であり、その人生の結末は思いもかけぬ死であった。単純に言うとも *Cupiditas* は死に

つらなるということだ。彼等がオークの樹の下で見つけたフロリン金貨の山が彼等にその独占欲を起させ、相互殺人沙汰が惹起された。〈死〉を退治する道行きで彼等は死にとらえられたのである。この金貨でもってこの世の、つまり生の栄耀栄華は思いのまま、と思った時が彼等の死の時である。フロリン金貨はいわば死との関係で考えられる。

この金貨の所在を教えたのがひとりの老人である。「どこに〈死〉がいるか教えろ、さもないと懲らしめてやるぞ」(Telle where he [Death] is, or thou shalt it aby) (VI, 756), という若者の脅しに応じて金貨の場所を教えたのだから、この金貨とは文脈上死に置きかえられる。ところで死といえ、この老人も実は死を求めてさすらっているのだ。老人の科白を聞いてみると、こうだ。自分は老いた年と若い年とを交換してくれる人を求めてインドまで出かけて探したが無駄であった。

And therefore moot I han myn age stille,

As longe tyme as it is Goddes wille.

Ne Deeth, allas, ne wol nat han my lyf. (VI, 725-27)

死が自分の生命を取ってくれない。それでこうして「休めない囚われ人」(restlees kaityf) (VI, 728) のように彷徨している。この杖で朝な夕な母なる大地をたたいて入れてくださいと懇願しているが入れてもらえない。「ああ、いつになったらわしのこの老骨は休まるやら」(Allas! whan shul my bones been at réste?) (VI, 733)。老人も実は三人の若者と同じように死を求めているのだ。ここに次のような対応関係が読みとれる。つまり〈死〉を探し求めている三人の若者、同じく死を探し求めている老人。その老人に教えられて死(結局自分たちの死)を見つけた若者、死の所在(黄金のあり場所)を先刻承知しているが、そのような死の誘いには応じない老人。ということは老人の求めている死は若者が求めている死とは別もの、ということになる。彼

は金貨に象徴されている死を求めていない。そう考えるとどうしてもこの死という概念を避けて通れないことになる。

若者たちが考えている死は現実の人の姿をした死である。(勿論こういう死のとらえ方は中世後期の一般的傾向であったが)。<sup>6</sup>つまり取っ掴えて殺すことのできる身体をもった存在である。早朝から酒屋でとぐろを巻いていた彼等は表の通りの葬列のベルを聞き、誰が死んだ、と酒屋の小僧にたずねる。皆様の昔馴染の人で、昨晚酔っぱらってベンチに腰をかけているところを、みんなが<死>と呼んでいるこそ泥に突然殺られたって話です。この国で人をみんな殺して、ものも言わずに立ち去るそうです、云々 (VI. 661-78)、と小僧は答えるが、彼も死をそういう人のかたちをしたものとしてとらえている。酒屋の主人も、あいつはここから一マイルも行った大きな村で男女、子供、使用人、小僧を殺したって話です、と補足説明をする (VI. 670-79; 686-88)。もっとも、死をそういうかたちでとらえていても、小僧も主人も死にはいつも用心しろ、と自戒している (VI. 683-84; 690-91)。素朴な死のとらえ方であっても、人間いつにても死への対処を考えておかねばならぬことを心得ている。これを受けて三人のならず者の一人は「ようし、道といい街路といい<死>を探し求めてやる」(I shall hym [Death] seke by wey and eek by strete.) (VI, 694), 「このけしからん裏切者<死>を我等の手で殺してやる」(...we wol sleen this false traytour Deeth) (VI. 669), 「とらえたら、<死>は死んでもらわねばならぬ」(Deeth shal be deed, if that [we] hym hente) (VI, 710) ということになる。死とは「取っ掴える (hente)」ことのできる対象である。ところが死はむしろ黄金に象徴されるひとつの観念としてあったわけであり、むしろ生身の者として逆に 'hente' されたのはこのならず者たちであった。そこにアイロニーがある。死をハントして、死にハントされる。奪うものが奪われるというこのアイロニーは、十四、五世紀のヨーロッパの詩、絵画に共通のものであって、とりたてて驚くにあたらぬ。<sup>7</sup>ただ死の所在を知りながらそういうアイロニーの犠牲たることを自らは求めないこの老人

が謎となってくる。

## II

ここで中世における死というものの解釈の諸元を一般論として検討しておきたい。キリスト教信仰では死は罪によって起る、すなわち罪は死、という考え方が基本にある。肉体の諸器官が正常に機能していて生理的には生きていても、罪のさなかにあるものは実は死んでいるのである。「…罪が支払う報酬は死です」(ロマ, 6:23), 「欲望ははらんで罪を生み, 罪が熟して死を生みます」(ヤコ, 1:15), 「愛することのない者は, 死にとどまったままです」(1ヨハ, 1:15)とあるがごとくである。「死にとどまったまま」ということは, 生きつつ死んでいる, という逆説である。それは永遠の死であり, 肉は生きていても霊的には死んでいることだ。<sup>8</sup> *The Book of Vices and Virtues*<sup>9</sup> にこの世の三つの段階の死を論じているところがある。まず罪において死に, 次にこの世において死ぬ (...we beþ dede in synne, and we beþ ded in þe world) (70/8-9)。神を愛し怖れる人はこの二つの死を通過し, 第三の死, すなわち肉と霊の分離を待っている (...þey abide þridde deþ, þat is departyng of þe body and of þe soule) (70/9-10)。死はいわば川であり, 此岸は肉の世界, 彼岸は霊の世界だ。彼岸にあるものは, 保養 (repear), 交わり (conuersacioun), 慰め (solas), 喜び (ioye), 慰安 (confort), 憧憬 (desyr) (70/10-15) である。だから聖なる人はこの死以外の何物でもない此岸を嫌悪し, 肉体の死を望むのである云々。ここにもこの世の生を死, この世の死を生のは始まり, と受けとめる思想が披瀝されている。十四世紀イギリスに広く普及した信徒教戒のためのマニュアルのひとつ *Speculum Christiani*<sup>10</sup> にも「誰もが肉体の死は恐れるが, 霊の死を怖れる人はいない」(Euery man dredeþ deth of the body, fewe dreden deth of saule) (70/24-25) という「ヨハネによる福音書」の釈義の引用に加えて Augustinus の語として「肉体の死は霊を肉から引きはなす。そのように罪は霊を生命から引きはなす」(...dedly synne deperteþ the soule fro lyfe)

(70/25), さらに罪は「生命を見失い, 死を発見する」(...leseȝ lyfe and fyndeȝ deth) (72/4) という発言が加えられている。中世末期の司祭たちはこういうマニュアルにおける諸聖人の語録を時宜に応じて引用し, 信徒に蛆に食われ肉の腐敗する視覚的におぞましい死の実相とは別に, 霊の死を戒めたのだ。この世での快樂は永遠の死, この世での苦しみと忍耐は永遠の生命につながる。ということは死によって生命を与えられることである。この逆説はキリストの死によって完成される。それは「キリストは死を滅ぼし, 福音を通して不滅の命を現わしてくださった」(2テモ, 1:10) という聖句にも明らかであり, またカルヴァリオの山までの道をご自分の死刑がそれによって執行される十字架を営々と運ばれたキリストは「自らの死を選ばれたが, 実は汝の生命を運ばれた」(...bereȝ his owne deȝ. and bereȝ þy lyfe) という Bonaventura の *Vita Christi* における発言によっても示されている。(上記引用は Robert Manning of Brunne による十四世紀初期の英抄訳による)。<sup>11</sup> 死は永遠の生命への解き放ちであり, 喪失ではなく, あえて言うならば利得である。簡潔に言うならば中世キリスト教の生死の逆説は, 生きて死ぬことであり, 死して生きることである。

### III

ところで老人に出会うまでの三人のならず者の生活はどうであったろう。彼等の行動はまず居酒屋 (taverne) から発する。そこは貪食, 飲酒, 賭事, 神名濫用等の生れるところ。Pardoner の説教の導入部を追っていくと, 使徒の言葉がしきりに出てきて, こうした悪徳に絶えず死のイメージがつきまとっていることが分る。こういう徒輩はキリストの十字架の敵であり, その末路は死であるし (the ende is deeth) (VI, 533) (フィリ, 3:19), 貪食にうつつを抜かず美食家は「悪徳に生きているかぎり死んでいるのと同じ」(Is deed, whil that lyveth in the vices) (VI, 548) (1テモ, 5:6) だし, 貪食の枝のひとつである酩酊は「人の知恵分別の墓場」(verray sepulture / Of mannes wit

and his discreiou) (VI, 558-59)なのだ。偉大な征服者アッティラは酔っぱらって眠っているうちに死んだ (Deyd in his sleep) (VI, 580)。また賭事には神名濫用はつきもので、そこから偽誓、怒り、嘘、殺人 (homycide) が生じる。そもそもこの居酒屋というところは、Pardoner によれば、彼等三人が悪魔の神殿でご奉仕を捧げるところ (...they doon the devel sacrifice / Withinne that devels temple) (VI, 469-70) であった。この居酒屋が貪食の宿るところという考えはごく普通の連想でもあり、また再三道徳書のマニュアルにも触れられたものである。<sup>12</sup> 居酒屋が悪魔の教会という裏返し of の考えもよく知られたものであった。 *The Book of Vices and Virtues* の中にも、

þe tauerne is þe deueles scole hous, for þere studieþ his disciples, and þere lerneþ his scolers, and þere is his owne chapel, þere men and wommen redeþ and syngþ and serueþ hym, and þere he doþ his myracles as longeþ þe deuel to do. (53/29-34)

とあり、十五世紀中期の信徒教戒書 *Jacob's Well*<sup>13</sup> の中にも

At þe tauerne often þe glotonye begynneth. for þe tauerne is welle of glotonye, for it may be clepyd þe develys scolehouc & þe deuelys chapel, for þere his dyseyples stodyen & syngyn, bothe day & nyȝt, & þere þe deuyþ doth meraclys to his seruautys. (147/26-29)

とあるが、居酒屋がいわば *radix malorum* のひとつであったことがあまねく常識であったことが分る。居酒屋はしたがって、*Cupiditas*, すなわちこの世の肉の思いの養成所である。だから「居酒屋は悪魔のナイフ」(Tauerne ys þe deuelys knyff) で、それで人の魂と生命を奪う。汝の生命も奪うし、汝の魂も殺す (slep soule) と Robert Mannyng は *Handlyng Synne* において戒める

(1017ff)。<sup>14</sup> 居酒屋はそこで人が生きながら死んでいる場所である。この三人のならず者はすでに霊の死者である。それが<死>の退治を思いたつ。

Thise riotoures thre of whiche I telle,  
 Longe erst er prime rong of any belle,  
 Were set hem in a taverne to drynke,  
 And as they sat, they herde a belle lynke  
 Biform a cors, was caried to his grave. (VI, 661-65)

教会の聖務日課の一時課 (prime) の鐘が鳴る頃 (すなわち午前六時頃) すでに連中は酒場でとぐろを巻いている。言いかえれば悪魔の教会での一時課を始めている。<sup>15</sup> そこへ彼等の元の仲間の一人の葬列の鐘がきこえる。この男も酔っぱらっている最中にく<死>に攫われたのだ。すなわち突然永遠の死にとらわれた人の葬列が行く。すでに生きながら死の世界にいる三人は、霊の生の世界である死を求めるのではなく、<死>を退治して実は永遠の死である地上的不死の世界を樹立しようとまるで英雄的に起ちあがる。「裏切者の<死>をみんなして殺してやる」 (...we wol sleen this false traytour Deeth) (VI, 699), 「<死>は死なねばならぬ」 (Deeth shal be deed) (VI, 710)。<死>は死なねばならない, これはまさにイエスが「...死を司る者を...ご自分の死によって滅ぼされた」(ヘブ, 2:14) ことへの悪質なパロディである。W.B.Toole 氏が Eric Stockton に賛意を表して言うように、それは "...their unwitting attempt to usurp the function of Christ" であり "an inversion of the Crucifixion" <sup>16</sup> であることは間違いない。この作品の聴衆は疑いもなくこの世の生が「主、キリスト・イエスによる永遠の生命」(ロマ, 6:23) であることを、また「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和」(ロマ, 8:6) であることも、*Cupiditas* によって人は「永遠に死する」(deþ he for euer) <sup>17</sup> ことも、さらに「勿ち死がやってくる」(cumeþ 3oure deþ sunnest yn place) <sup>18</sup> こ

とも、あらゆる機会にマニュアルにのっとった教会の説教を通して、キリストの古聖所下りのお芝居や絵画を通して、心得えていたはずである。キリストがその死によって死を滅ばされた。さればこの三人のならず者の死退治がキリストの死退治の奇妙なあべこべの行為であることは聴衆はすぐ気がついたはずである。自らの霊の死によって死を退治し損った三人のならず者、自らの肉体の死によって霊の死を退治されたキリスト、この二項対立のアイロニーを聴衆は十分に理解できた。そしてこの冒瀆洗的行為による彼等の突然の死は小気味よいものであり、そこから抽出される教訓を理解し、自分たちは生きつつ死んでいる生活から、死して生きる生活に入るためにいかにすべきかということに深く思いを至したはずである。さればどうすればよいか、すなわち死を退治して永生を願った三人のならず者ものではあったが、真実死を殺して真の生を得るためには彼等はどうすればよろしかったのか。(因みに Pardonier はそういう聴衆の思いを十分に計算して、つまりいつものように自分の説教の効果を確認して、この説教終了後巡礼の仲間に聖遺物でもってひと儲けをたくらんだ。そして大恥をかいた)。

#### IV

Pardonier はこの説教を終えるにあたって「ああ、呪われた罪とし罪の中でもっとも呪われたものよ」(O cursed synne of alle cursednesse) (VI, 895) と言って、裏切者の殺人、貪食、贅沢、賭事、キリストへの冒瀆、神名濫用、傲慢などを列挙して慨嘆する。これらの諸悪はおそらく彼の日頃の説教の総括によれば *Cupiditas* であり、*radix malorum* であることになる。(そしてその罪を自分は犯しているとすでに豪語している)。彼はそれを ‘avarice’ という罪におきかえている (VI, 905)。どうしたらそれが許されるのか。Pardonier は自分がその罪を ‘assoille’ してやる、と言う (VI, 387, 913, 933, 939)。いわゆる赦免 (absolution) を与えてやる、と言うのだ。それには ‘pardoun’ を入手せよ、と諭す。そうすれば、生まれたばかりのように ‘clene’ にかつ ‘cleer’ になる、



と宣言する (VI, 915-16)。果して 'pardoun' がそういう効力をもつものなのか。そもそも「免償証」(pardon) というのは、罪 (culpa) を許すものではない。教会の与える悔悛の秘跡というものは三つの行為を含んでいる。つまり痛悔 (contrition), 告白 (confession), そして償罪 (satisfaction) であるが、痛悔、告白によって有限の罪 (culpa) を取り払って後、その罪に匹敵する罰が、現世もしくは煉獄において充足されねばならない。Pardon は最後の償罪に対してのみ有効である。<sup>19</sup> 人は原罪を抱えてこの世に生を受けるが、これは洗礼によって浄められる。しかし生きてある限り犯す自罪を許す (absolve) のが悔悛の秘跡であって、pardon ではない。Pardon はすでに absolution を受けた者に、次に待っている罪の償いに、合法的な教会の権威が宝蔵から取り出したキリストと諸聖人の功德を代替として与えて罪 (poena) を免じてもらうものである。生まれただけのように 'clene' かつ 'cleer' にしてくれるものがあるとすれば、それはむしろ悔悛の秘跡であって pardon ではない。個人の罪を強く意識した画期的な第四次ラテラノ公会議 (1215年) での教令で、成人は男女を問わず少なくとも一年に一回の悔悛の秘跡が義務化されたが、その後十三、四世紀、さらには十五世紀にかけても、この公会議の趣旨にのっとった聴罪司祭や悔悛者向けのラテン語、さらには各国母語による教令集やマニュアルが公けにされ、それらに悔悛の秘跡の奨励が盛りこまれてきたのも、いかなる人も罪なくしては生き得ない、という実情、言いかえればいかなる人も生きつつ死んでいる、という実情をふまえて、人が永遠の生命にあずかるいわば保証として悔悛の秘跡が考えられたからである。だから悔悛の余裕もないほどの突然の死を人々は恐れる。carpe diem (日々を楽しめ) のかけ声と memento mori (死を思え) の思想が同居する。<sup>20</sup> 再度言うが、こういう現世の罪を赦し、教会と神との和解を俗信徒に果させるのは悔悛であって pardon ではない。しかし十四世紀の現実として免償は人を罰からも罪からも (a poena et a culpa) 免じるという考え方が極めて普通になってきたという事実もある。説教家がしばしば情熱のあまり免償の効力を罰のみならず罪

に関して印象づけてしまったり、また罪には二つの側面、罪責と罰という二面があって罪は当然罰の一側面としての要素をもっているからである。<sup>21</sup> Pardoner が pardon は免償にのみ有効であるということを知っていてあえて罪の許しまで主張したのか、それとも当時の慣行に従って免償の効力をそこまで拡大解釈したのかは不明である。すくなくとも彼はアウグスティヌス修道会派のスペイン、ルウンシバルの聖母施療院の分院であるロンドン、ルウンシバル施療院の pardoner であるから (Gen. Prol., 670) <sup>22</sup> 教皇庁にも直属し聴罪権も与えられた割合に高い地位の聖職者 (a noble ecclesiaste) (Gen. Prol., 708) であつたろう。<sup>23</sup> だから悔悛の秘跡と免償の区別は心得えていたにちがいない。確かなことは彼が自分の免償行為が悔悛の秘跡と同じ働きをする、すなわち ‘avarice’ の罪を ‘assoille’ できると解説、吹聴していることである。教会的立場に立つと、この三人のならず者の末路という説話の伝える教訓は、まず罪責赦免を得るための悔悛の必要性でなければならない。この話は免償を受ける間もなく死の犠牲になった人物のアイロニーではなく、免償資格たる悔悛の意識のかけらもなく *carpe diem* に明け暮れ、まことの死の意味の認識に欠けていたために永遠の死を与えられた人物のアイロニーを提供している。しからば若者に死の在りかを教えた老人はこの話の中でどういう立場にたつのであろうか。

## V

「なぜ貴様は顔だけ出して、あとは全身包んでいるのだ。なぜそんなべらぼうな年まで長生きしているのだ」 (Why artow al forwrapped save thy face? / Why lyvestow so longe in so greet age?) (VI, 717-18) と、若者のうちでもっとも奢りたかぶった者の問いに老人は答える。

“For I ne kan nat fynde

A man, though that I walked into Ynde,

Neither in citee ne in no village,  
 That wolde change his youthe for myn age:  
 And therfore moot I han myn age stille,  
 As longe tyme as it is Goddes wille.  
 Ne Deeth, allas, ne wol nat han my lyf.  
 Thus walke I, lyk a resteleees kaityf.  
 And on the ground, which is my moodres gate,  
 I knokke with my staf, bothe erly and late,  
 And seye 'Leeve mooder, leet me in!  
 Lo how I vanysshe, flessch, and blood, and skyn!  
 Allas, whan shul my bones been at reste?  
 Mooder, with yow wolde I chaunge my cheste  
 That in my chambre longe tyme hath be,  
 Ye, for an heyre clowt to wrappe me!  
 But yet to me she wol nat do that grace,  
 For which ful pale and welked is my face.'" (VI, 721-738)

この後、老人にはもっと親切に、と若者をたしなめた後丁寧に<死>の在りかを教えてやり、彼等の後姿に神の加護を祈ってやり、行いを改めるようにを薦めている (God save yow... / And yon amend!) (VI, 766-67)。上記引用の中にいろいろ謎めいた発言があつて、チョーサー学者を困らせてきている。まずこの老人は顔だけ残して身体を包んでいる放浪者である。その目的が二つある。ひとつは自分の老齡と若さを取りかえてくれる者を探していること。もうひとつは母なる大地を杖でたたいてそこへ入れてくれることを求めている。つまり人生に疲れ果てて安らぎを求めているかのようである。Kitteredge はこの老人を 'Death in person' ではないかと言う。<sup>34</sup> 成程顔だけ残して身体全体を包むというのはいかにもおどろおどろしい。老人のこの服装

は亡骸の雰囲気を連想させてもおかしくない。また当時の会葬者 (mourner) の姿も思わせる。<sup>25</sup> いずれにしても死と雰囲氣的に深くかかわっている。彼は三人の若者に〈死〉の所在を教えるのであるから、Hamilton 女史の言うようにこの老人を死の先触れ (harbinger) と解釈してもおかしくない。<sup>26</sup> 確かに Owen も指摘しているように、この老人も死を求めているのに死や死の先触れが死を求め探しているというのは論理的にあわないかもしれないが、<sup>27</sup> Owen が、この老人を単なる老人として極めて常識的に受けとめようとする限り、そうした常識的な論理が出てくるのであって、老人の求めている死が、金貨の山に表わされる死ではなくて、逆説的に真の生につらなる死であるとすれば、もはや金貨に胸をときめかさないう年齢の老人が (さればこそ金箱 [cheste] はいらないと言う)、真の死とは何ぞやと教える警告者として死の先触れとして出現するのも中世的伝説にてらしてみればおかしくもない。先行学者の結論はともかくとしてまずこの老人を死との関係でとらえねばならない、ということだけはふまえておこう。

彼は放浪者として登場する。死ねずにさまよっているのである。こういう老人の生態を見ると、ここに「さまよえるユダヤ人」の影が見えてくる。聖なるものに加えられた冒瀆行為の罰として地上をさまようように運命づけられた人物の話はキリスト教世界、異教世界を問わず型となっている。イエスの裁判もしくは処刑に際して、イエスに暴行を加へ、暴言を吐いたアルメニヤの一人のユダヤ人の話が同巧異曲のかたちで残っている。他の文献ではそれが Cartaphilus (のちに回心してアルメニヤに住んでヨセフと呼ばれた) という人物だとされているが、「わたしが戻ってくるまで待っていなさい」というイエスの言葉通り百歳まで生きては、元の三十歳にまい戻って生きつづけ、イエスが戻ってくるまで死ぬに死ねないユダヤ人の話は十三世紀を中心に流布していた。<sup>28</sup> その柔和 (若者への優しい大人しい態度)、敬虔 (神の意志のままに生きていく)、分別、休みなき旅、などのこの老人の特色を見ると確かに「さまよえるユダヤ人」のイメージも捨てがたい。しかし、チョー

サーの老人はそれだけでは済まされない要素をもっている。老齢と若さを取りかえたいと願う一方、自分の金箱と安らぎの死を取りかえる願望ももっている。彼は「さまよえるユダヤ人」を想起させるが、「さまよえるユダヤ人」そのものでもない。杖で大地をたたき仕草も、六世紀の Maximian の第一エレジーの杖 (baculo) で大地を (humum) をたたき (pulsat), 母 (genetrix) に入れてくれと慈悲を請う (nati miserere laborum) 老人も、R.Tupper も指摘するようにチョーサーのそれと類似している。<sup>29</sup> 永遠にさまようというテーマだけなら、人にして初めて殺人の罪を犯したカインも死を求めてそれを得ることのできない人物であるし、ユダともども大地に入ることを限りなく拒絶される男だ。<sup>30</sup> いずれも虚実取りまぜ中世に流布したテーマであるのでチョーサーはこれを心得ていたと考えてもよい。ただこれら中世にあまねく知られていた故事が聴衆に雰囲気的にポピュラーな連想を強いることよりも、問題は、この老人が、ではこの作品の中でどのような役割を果たしているのか、ということである。もう一度三人の若者の最後に至る件りに戻ってみよう。

三人の若者が、没義道な死に方、つまり死に退治され、おそらくは地獄おちになるであろう浮目に遭わないようにするには、彼等はどうすればよかったのであろうか。それに対して老人は実は忠告を与えていたのである。彼は老人としての知恵、分別をもっているかのようなのである。若者の乱暴な態度に聖書を引用して「白髪の前では起立しなさい」(Agayn an oold man, hoor upon his heed, / Ye sholde arise.) (VI, 743-44) (レビ, 19:32) とたしなめる。それは「神を畏れ」ることにも通じるのである。主の命令だからだ (レビ, 19:32)。

“Now, sires,” quod he, “if that yow be so leef  
 To fynde Deeth, turne up this croked wey,  
 For in that grove I lafte hym, by my fey,  
 Under a tree, and there he wole abyde;

Noght for youre boost he wole him no thyng hyde.  
 Se ye that ook? Right there ye shal hym fynde.  
 God save yow, that boghte agayn mankynde,  
 And yow amende!" Thus seyde this olde man;...(VI, 760-67)

この老人は知っているのだ。 *Radix malorum est Cupiditas* ということ。その *Cupiditas* が金貨＝死であることも。だから若者にその在りかを教えてやった。しかしそれだけなら無礼、乱暴な若者へのしっぺ返しと解釈されても仕方がない。しかし彼は若者たちが墮地獄にならないように警告を与える。‘Amende’ するのだよ、善に心を選ずのだよ。それなら今のうちだよ、神様の御手を信じるのだよ。お前さん方は霊の死である *Cupiditas* に向っているのだよ、と彼等の後姿に声をかけた。‘Amende’ するとは、悔い改めてのち罪滅しをすることである。彼等はその忠告を歯牙にもかけない。そして霊と肉との死へと突進していく。さらに彼等は決して悔い改めなかった (*nevere to repente*) (VI, 850)。だから悪魔は彼等の地獄落ちの許可を得てしまった (VI, 848)。聴衆の醒めた目からは、それみろ、老人の言うことに耳を貸さなかったからだ、という思いがある。まことアイロニカルである。そして金貨の山を見つけた途端「もはや<死>を求めることをやめた」(VI, 772)のである。死のかわりに、死と同然である金貨に興味を示したからである。やっとな彼等の霊肉の死を見つけたのである。これもアイロニカルである。彼等のここまでの道は ‘*croked wey*’ であった。それは罪の道、‘*crokid in couaytyf*’ (Rolle, *Psalter*, 31.3) であった。老人は今しがた死＝金貨に逢ってきて、それを捨てて顧みることをしなかった。そこに彼が求めている死がないことを充分に承知しているのだ。*Cupiditas* が生きながらの死であることを理解しているし、その死が生に通ずる道は悔悛と償罪であることも承知している。

しかしこうした老人の叡知を示すシーンと、彼自身の自己紹介の惨めさは対称的である。彼は自分を流浪者であり、「休みなき困われ人」(*resteless*

kaityf) ととらえる。<sup>32</sup> これは後刻 Parson がその説教の中で ‘covetise’ を戒める時にパウロの嘆息（ロマ，7:24）を引用して “Alas! I caytyf man! Who shall delivere me from the prisoun of my caytyf body?” (X. 344) と発言するが，パウロの言う「五体の内にある罪の法則のとりこ」（ロマ，7:23）であることを指しているのではないか。こうした D.Pearsall の「ローマの信徒への手紙」の影響の指摘<sup>33</sup>もさることながら，“Ne Deeth...ne wol not han my lyf.” (VI. 727) という老人の科白から考えると，Parson が Gregorius の言葉として与える

“To wrecche caytyves shal be deeth withoute deeth, and ende withouten ende, and defaute withoute failynge.” (X. 214)

“They shullen folwe deeth, and they shul nat fynde hym: and they shul desiren to dye, and deeth shal flee fro hem.” (X. 216)

という内容に近い。これは Parson が地獄の悲しみについて述べる件りである。地獄では神の与えたもうた秩序が一切欠けている。死ぬことなき死，終末なき終末，なくなることなき欠乏，責苦があったとしても決して死なず，死んでも責苦を逃れるべくもない。そういう ‘kaytyf’ な状態は Richard Rolle の言葉をかりると “any welth of þe worlde” がもたらすもの。<sup>34</sup> *Piers Plowman* の七大罪源のうち貪欲 (Covetise) の告白の中にも “I haue been covetous, quod this caytif” (B.V. 200)<sup>35</sup> とあるごとく，地上の肉の法則のもたらす欲情が ‘kaytyf’ であることが示されている。つまり ‘restlees kaytyf’ (VI. 728) であるということは，貪欲であり，地上の富の愛であり，パウロの言葉に従うと「五体の内にある罪の法則」にとらわれて (captivantem) いる惨めな，価値のない，そしてそれは地獄の苦しみの相を呈する地上の放浪者の姿を表わすものである。老人は杖で大地をたたく。母なる大地は中世人にとっては「わたしたちは，何も持たずに世に生れ，世を去る時は何も持って行くことはでき

ない。」(1テモ, 6:7) のパウロの言葉や「わたしは裸で母の胎を出た, 裸でそこに帰りましょう」(ヨブ, 1:21) というヨブの言葉との連想で考えられていたらしい。十二世紀から十四世紀にかけてのさまざまな神学解説書をふまえている一般信徒向け教理解説書 *Memoriale Credencium* (十五世紀初期) によると,

Seynt poul þat saiþ. Nouȝt we brouȝt into þis world: ne nouȝt schul we bere out of þis word. And of þe holy man Job þat saiþ. Naked y came fro my moder wombe: and naked I schal turne þider aȝeyne. þat is to vnderstonde. to þe moder wombe: þat is þe erthe þat kyndeliche is oure furst moder. God ȝeueþ and bynymmeþ / as it is plesyng vn to god: so be it y do.<sup>36</sup>

とあるが, これは *Avarice* の戒めの件りでの発言である。母なる大地に帰るとは, もともと地上の万物は神によって与えられたものであるからには人はこれを善用すべきであるが, 神の意志により結局は無となって大地に帰ることになる。この老人はそれをよく心得ている節がある。自分の金箱は返すからどうぞもとの無に帰していただきたいと母なる大地に願うのである。その金箱と交換に身にまとう 'heyre clowt' がほしいと願う (VI, 736)。この 'heyre clowt' とは何だろう。'hair shirts' のことだろうが, 文脈から推して経帷子 (shroud) であるなら (*MED*, clout, 6 [c]), 彼は一日も早くそれにくるまれて大地に休みたい, と願っているのだ, しかしこの 'heyre clowt' が修道士や悔悛者の直接肌にまとう償罪の毛衣であるとすれば (*OED*, Hairshirt; Haire),<sup>37</sup> この老人は悔悛をすませることを望んでいることになる。*Cupiditas* のとりこになって生きつつ死ぬよりは, 死ぬことによって霊的に生きたいのだが, それには今悔悛が必要だということをよく心得ている。さればこそ三人のならず者に罪滅しをする (*amende*) なら今だぞ, と警告を与えることができるの



である。ここで不思議なことにぶつかる。では何故彼は悔悛もせずにもるで地獄の責苦を味わう ‘restlees kaytyf’ でありつづけるのか。この老人の謎はここにある。彼の言葉をかりると “As it is Goddes wille” (VI, 726) だからだ。与えるのも奪うのもご自由な神が、その機会を与えてくださらないのだ。一切を奪って元の母なる大地に帰ることを許してくださらないからだ。

## VI

老人は自分に悔悛が必要なことを知っている。そして罪の償いも必要であることを知っている。その罪の償いを神の意志のつづく限り (As longe tyme as it is Godde's wille) (VI, 726) つづけねばならないことも心得ている。ただしそれは「終わりなき死」(deep wiþ-outen ende) であり、人は「いつまでも生きつつ死んでいる (euer-more a man or a womman lyueþ [þere] dyenge...) のだ」。<sup>8</sup> 悔悛の毛皮を着て母なる大地の胸に戻って安らかになることを神がまだ許したまわぬのである。若者に軽蔑される中世の老人の常套表現で描写されている彼は (ful pale and welked) (VI, 738), <sup>9</sup> チョーサーはそのように断言していないが, “Le Regret de Maximian” の語り手のように若き日には美しさ、自由な振舞い、奢りがあったことであろう。「もしお前さん方もこの世にとどまって長生きすれば、他人がお前さん方にそういう振舞いをするを望まんじやろう」(Namoore than that ye wolden men did to yow / In age, if that ye so longe abyde.) (VI, 746-47) という老人の若者への科白は, “Le Regret de Maximian” の最終スタンザの、もし自分が若がえったら、今自分を蔑んでいる連中の「髪をひつつかんで、人気のないところで大人しくさせ、ぶちのめしてやる (...ich hire heuede bi þe tresce / In a derne place, / To meken and to monge.) (268-270) <sup>10</sup> ほど強くはないが、老人の口惜しさがよく表われている。しかし彼は長く生きた。それゆえにこそ人の世の栄華の空しさも、そしてその栄華はフロリン金貨に象徴されるように生きつつ死んでいる生活であることも、またそれを後悔しても今となって遅いことも、しかしそれ故に、死ぬ

ることによって真に生きるために悔悛が必要なことも、そしてそれには罪滅しの苦しさがつきまとうことも知っている。彼にできることは、極道者の三人の若者に警告を与えることである。老人の姿が若者への教訓として扱われることは、この時期の老いのエレジーの特徴でもあった。<sup>41</sup> そういう文脈でなら、老齢そのものが罪の象徴でもある。「今一番欲しいのは死、どうしてわたしを選んてくれない」(Deþich wilni mest, / Wi nis he me I-core?) (“Le Regret de Maximian,” 212-3) という詠嘆も「キリスト様、教えてください。わしはこうして生きているよりいっそ死にたい」(Crist þou do me reed! / Me were leure deed, / Þen þus aliue to bene.) (259-61) という Maximian の呼びも一種の警告である。*The Parlement of Three Ages*<sup>42</sup> において〈老年〉(Elde) が青年 (3outh) と中年 (Medill Elde) に向って「わしをお二方の鏡とせられよ (Makes youre myrrouns by me) (290) と言うのもその一例である。

この老人は若者に老人を敬まえと教える。死への道が罪の道 (croked wey) であることにも注意を喚起した。〈死〉がオークの樹の下にいることも (オークは死のシンボルでもあった),<sup>43</sup> そして、いずれ分ることであるが、その〈死〉というのは金貨の山であることも教えたことになる。それは暗にそれこそ *radix malorum* であることを教えたのである。彼は真理がなんであるかを知っている。ただそれが実行できずにここまで来た。聴衆はつとに数々の説教マニュアルをふまえた説教によって *Cupiditas* が「永遠につづく死」であり (þe deþ þat euer schal last) (*Memoriale Credencium*, p.103), 殺人 (manslau3t) につらなること (*Memoriale Credencium*, p.101; *The Book of Vices and Virtues*, 39 / 22-24), 悪しき死 (euyl endyngge) に終ること (*Handlyng Synne*, 6223-24), 「悪魔の許にたった一人で行くことになる」(Hyghly shal he go a-lone / To þe deuyl, body and bone.) (*Handlyng Synne*, 5387-88) ことを知っていたのだ。そしてその通りになった若者の運命に小気味よい思いとともに、自らも肅然たる思いになる。

*The Pardoner's Tale* における老人像の解釈は一筋縄ではいかない。一元解

積は無理である。確かなことはこの老人も Pardoner と同様 *Radix malorum est Cupiditas* ということ十分に承知して、しかもその戒めの実践を怠り、悔悛の機会を失ったため絶望の詠嘆を表白しなければならないのである。悔悛の秘跡の厳しさに対する過度に敏感な恐怖である。それが彼をして告白を遅延せしめてきた。<sup>44</sup> そこから来る己が救霊への絶望が彼の切なる死への願望と表裏になっている。それゆえ *The Middle English Sermons*<sup>45</sup> の著者も言うように「地上の束の間の悦楽」(þe lust of a moment) と交換にそれにふさわしい罰が永遠につきまどっているのだ (þe payn dew þer-fore abideþ for-uer) (275/16-17)。彼の罪はカインのそのように「神の力と慈悲」(hys myzt & hys mercy boþe) (*Handlyng Synne*, 12306) にとどかない。そして神が定めただけ (そしてそれはいつのことやら)、罪滅しの生活をしてさまよわねばならない。それはある意味で *Everyman* でもある。そして偶然出あった三人の若者に婉曲に忠告を与えたのだ。この見事な説話を披露した Pardoner 自身も *Radix malorum est Cupiditas* ということは嫌ほど知っている。ただぬげぬげと *Cupiditas* を戒める説教をして自分では実践しないだけだ。若者に待ちかまえている運命も、Pardoner に待ちかまえている運命も、この老人の現状ではあるまいか。生きつつ死に、死なき死という地獄の責苦さながらの生き方が待っているのだ。<sup>46</sup> 罪を犯すことによって罪という罰を受けて生きつづけることになる。<sup>47</sup> 所詮それは人間の業であるかも知れない。Augustinus の次の言葉に耳を傾けてみよう。さまよえる我等人間の共通項が見出せるであろう。「われわれは祖国においてしか幸福になれない旅人である」と Augustinus は考える。

われわれはこの死すべき様の生において、「主から離れて巡礼して」(II コリ, 5:6) いるのであるが、そこでこそ幸せになれる祖国に帰ろうと願うならば、この世を、用いるべきであって、この世を享樂してはならない。<sup>48</sup>

けだし、この老人はかつてこの世を神のために用いず享樂した *caitif* な (囚われた、惨めな、みすぼらしい、おどおどした、しかも欲深い)<sup>47</sup> さすらい人ではあるまいか。所詮我等は誤ちつつも祖国に帰るべく生きる旅人、巡礼である。チョーサーは老人の姿に測隱の情を感じているのであろうか。我等も、巡礼衆の仲間に自分の説教の効果を信じて免償をぬけぬけと売りつけて失敗する *Pardoner* の最後の恥辱 (この問題については稿をあらためたい) に快哉を叫ぶことはあっても、この老人の「わしも行くところがあるのじゃ」(I must go thither as I have to go) (VI, 749) と今日もまたさすらいつづける姿に他人事ならぬ測隱の情を感じるのである。

## 注

- 1 以下 Chaucer よりの引用は *The Riverside Chaucer*, 3rd Ed., ed. Larry D. Benson (Boston: Houghton Mifflin 1987) より。
- 2 cf. C.O. Chapman, "The Pardoner's Tale : A Medieval Sermon," *MLN*, XLI (1926), 8; N.H. Owen, "The Pardoner's Introduction, Prologue, and the Tale : Sermon and *Fabliau*," *JEGP*, LXVI (1967); R.P. Merrix, "Sermon Structure in *The Pardoner's Tale*" *ChR*, 17, 3 (1982).
- 3 この話は Antti Arne (Stith Thompson 英訳) の *The Types of Folk Tale* (Helsinki : Academia Scientiarum Fennica, 1928) の No.763 にも記録されていて、周知の民話であつたらしい。
- 4 日本語訳聖書の引用は日本聖書協会の新共同訳によった。
- 5 St. Augustine, *The Choice of the Will*, trans. R.P. Russell, *The Fathers of the Church*, new trans., vol 59 (Washington, D.C. : The Catholic Univ. of America Press, 1967), p. 210.
- 6 John Speirs, *Chaucer the Maker*. (London : Faber and Faber, 1951), p.175; Philippa Tristram, *Figures of Life and Death in Medieval English Literature* (London : Paul Elek, 1976), p.177 et passim.
- 7 Philippa Tristram, *ibid.*, pp.162f.; T.S.R. Boath, *Death in the Middle Ages : Mortality, Judgment and Remembrance* (London : Thomas and Hudson), 1972, pp.104-7.
- 8 *New Catholic Encyclopedia* (Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1967), Vol.IV の "Death (in the Bible)" の項参照。

- 9 W. Nelson. Francis, ed., *The Book of Vices and Virtues*. E.E.T.S., OS. 217 (London : Oxford University Press, 1942).
- 10 Gustaf Holmstedt, ed., *Speculum Christiani*, E.E.T.S., OS. 182 (1933 ; New York : Kraus Reprint, 1972).
- 11 J.M.Cowper, ed., *Meditations on the Supper of Our Lord. and the Hours of the Passion by Cardinal John Bonaventura, drawn into English Verse by Robert Mannyng of Brunne* E.E.T.S.OS. 60, London: N. Trübner, 1875, p.xii: 18/574.
- 12 W. F. Bryan and Germaine Dempster, eds., *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (London : Routledge and Kegan Paul, 1941), pp. 437-38.
- 13 Arthur Brandeis, ed., *Jacob's Well*, E.E.T.S., OS, London: Kegan Paul, 1900, 141/26-27.
- 14 Frederick J. Furnivall, ed., *Robert Brunne's "Handlyng Synne," Part I*, E.E.T.S., OS. 119, London: Kegan Paul, 1901.
- 15 ここには一種のパロディの普遍的性格がみられる。彼等は公式の世界にまさに対応する自分たちの世界を建てているのである。
- 16 William B. Toole, "Chaucer's Christian Irony: The Relationship of Character and Action in the *Pardoner's Tale*," *ChR*, 3 (1968). 40. ここで言う Erick Stockton の言説とは同氏の "The Deadliest Sin in 'The Pardoner's Tale'," *Tennessee Studies in Literature*, VI (1961) への寄稿論文を指している。
- 17 *Handlyng Synne*, 6048.
- 18 *Ibid.*, 6055.
- 19 A.L.Kellog and L.A.Haselmayer, "Chaucer's Satire of the Pardoner," *PMLA*, lxvi (1951) 251; Alastair Minnis, "Chaucer's Pardoner and the 'Office of Preacher'" *Intellectuals and Writers in Fourteenth-Century Europe: J.A.W.Bennett Memorial Lectures Perugia, 1984*, ed. Piero Boitani and Anna Torti (Tübingen: Gunter Narr Verlag, 1986), pp.100-101.
- 20 George R. Coffman, "Old Ages from Horace to Chaucer: Some Literary Affinities and Adventures of an Idea," *Speculum*, IX (1934), 255: Philippa Tristram, *op. cit.*, pp.9, 45.
- 21 Isamu Saito, *A Study of "Piers the Plowman" with Special Reference to the Pardon Scene of the "Visio"* (Tokyo : Nan'undo, 1966). p.135.
- 22 *The Riverside Chaucer*, p.824.
- 23 田巻敦子「中世イングランドにおけるパードナーの研究」『キリスト教史学』第41集, 1989, 7.
- 24 G. L. Kittredge, *Chaucer and His Poetry* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1915), p. 215.
- 25 Boath, *op. cit.*, pp. 84, 112, 114, 115.
- 26 M.P.Hamilton, "Death and Old Age in *The Pardoner's Tale*," *SP*, xxxvi (1939), 571 ff.
- 27 W.J.B.Owen, "The Old Man in 'The Pardoner's Tale'" *RES*, n.s.2 (1951), 49-55.

- 28 George K. Anderson, *The Legend of the Wandering Jew* (Hanover: Brown University Press, 1965; 3rd rept. 1991), pp. 18-19; Nelson Sherwin Bushwell. "The Wandering Jew and the Pardoner's Tale," *SP*, XXVIII (1931), 454.
- 29 Bryan and Dempster, *op cit.*, p.437; *The Riverside Chaucer*, p. 909.
- 30 Lee Patterson, *Chaucer and the Subject of History* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1991), pp. 415-18.
- 31 *MED*, Croked, 4 (c).
- 32 VI, 728.
- 33 Derek Pearsall. "Chaucer's Pardoner: The Death of a Salesman," *ChR*, 17, 4 (1983), 363.
- 34 "The Form of Living," in H. E. Allen, ed., *English Writings of Richard Rolle, Hermit of Hampole* (Oxford: Clarendon Press, 1931), p. 115.
- 35 William Langland, *The Vision of Piers Plowman: A Complete Edition of the B-Text*, ed. A. V. C. Schmidt (London: J.M.Dent, 1978).
- 36 J.H.L.Kengen, ed. *Memoriale Credencium : A Late Middle English Manual of Theology for Lay People*, ed. J. H. L. Kengen D.Litt Dissertation, Nijmegen: Katholieke Universiteit, 1979, p. 104
- 37 Robert P. Miller, "Chaucer's Pardoner, the Spiritual Eunuch," *Speculum*, XXX (1955), 197; Lee Patterson, *op. cit.*, p.411 もこの 'clowt' を 'clowt of penance' と解釈している。
- 38 *The Book of Vices and Virtues*, 71/25-28.
- 39 Alice K. Nitecki, "The Convention of the Old Man's Lament in the *Pardoner's Tale*," *ChR*, 16, 1 (1981), 78.
- 40 Carleton Brown, ed., *English Lyrics of the XIIIth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1932), p. 100.
- 41 Rosemary Woolf, *The English Religious Lyrics in the Middle Ages* (Oxford: Clarendon Press, 1968), p. 104; Philippa Tristram, *op. cit.*, p.63.
- 42 M. Y. Offord, ed., *The Parlement of the Three Ages*, E.E.T.S., No.246 (London: Oxford University Press, 1959).
- 43 F. H. Candelaria, "Chaucer's 'Fowl OK' and *The Pardoner's Tale*," *MLN*, LXXI (1956), 321-22; *The Riverside Chaucer*, p.909.
- 44 Lee Patterson, "Chaucerian Confession : Penitential Literature and the Pardoner," *Medievalia et Humanistica*, n.s., No.7 (1976); *Chaucer and the Subject of History* (Madison: The University of Wisconsin, 1991), p. 41n.
- 45 Woodburn O.Ross, ed., *Middle English Sermons*, E.E.T.S., OS, 209 (London: Oxford University Press, 1960).
- 46 老人が三人の若者に「レビ記」19：32の「白髪の人の前では起立し、長老を尊び云々」を引用した際、「レビ記」ではそれにつづいて「あなたの神を畏れなさい。

わたしは主である」とあるのにそれをオミットしたのはひとつには心理的に忸怩たるものが自分にあったからであろう。生きているのでもなく死んでいるのでもなく、永遠に第二の死の死に苦しみつつただ「死」において死につつあるのだ。(L.O.Purdon, "The Pardoner's Old Man and the Leviticus 19.32," *English Language Review*, XXVIII [1990], 4).

47 Alfred L.Kellog, "An Augustinian Interpretation of Chaucer's Pardoner," *Speculum*, XXVI (1951), 465-66.

48 『キリスト教の教え』加藤武訳『アウグスティヌス著作集』第六卷（東京：教文館，1988），pp. 31-32.

## Synopsis

### The Old Man in Chaucer's *Pardoner's Tale*

Isamu Saito

In his sermon the Pardoner tells an exemplary tale in which three riotors set out from a tavern in quest of Death, proclaiming, "Death must be slain." They meet an old man, who directs them to a tree under which they shall find Death whom they seek. On the spot, however, they find a heap of gold. From this moment they no longer search for Death. (The truth is that Death, in disguise of gold, has been looking forward to their coming under the tree.) One of them goes to an inn for drink, and poison the wine. The others plan his death. On his return, they murder him, but die of the poisoned liquor.

The old man is also searching about for Death, but is destined to wander in vain unable to find it. What has to be noticed here is that Death the young men hunt for and death the old man searches for are not the same one. He tells the riotors Death's whereabouts but he does not care about the Death under the tree although he is desirous of death.

The Pardoner boasts that the theme of his sermon is always "*Radix malorum est Cupiditas* (The root of the evil is cupidity)." The lesson of this exemplary tale is to warn the audience of the danger of *Cupiditas* (the desire for earthly things) which finally leads to death.

In medieval Christianity sin is considered to be similar to death. As St. Paul says "... the wages of sin is death." (Rom, 6.23); "When lust hath conceived, it bringeth forth sin." (James, 1.15); "he that loveth not to his brother abideth in death." (1 John, 3.14). Abiding in death implies that a man is living in spiritual death. Deadly sin



separates the soul from very life and loses life and finds death (*Speculum Christi*). The three riotors begin their day's work at the tavern, or the school house, where the devil teaches them *Cupiditas* (the spiritual death). The remedy for such a death is penitence of which the riotors are unmindful. That they are careless about their spiritual death is apparent to the audience whose point of view is omniscient. The old man calls out to the riotors from behind. "May God, who redeemed mankind, save you and amend you!" He seems to know that to avoid descending into Hell they have to amend their sin and to be penitent before God. Death they arrest is Death symbolized by gold. Then what is the death the old man desires? He confesses that he must keep his old age as long as it is God's will. Death will not take him. Thus he walks as a restless caitiff and knocks with his staff upon the ground, which is his mother's gate. He wishes mother ground exchange his chest with her. He cannot die however seriously he wishes. It seems that he has to continue to live without end, living evermore dying as a restless caitiff like the wandering Jew who seeks death, and shall not find it. Death flees from him, Why? Because God wills it. God will not give him the opportunity to be penitent before Him. Probably he has led sinful life like the hypocritical preacher Pardoner and the three riotors. He is old and has experienced the pleasure of life (*carpe diem*) and now is forced to think of death (*memento mori*). The end of the riotors will be the end of this trickster, the Pardoner, in future. The old man in the past was probably what the riotors and the Pardoner are now.

The old man is, as it were, Everyman and his figure is a warning to all persons that they may turn their mind to penitence at all times. The old man must go whither he has to go looking for the permission from God to be penitent. We should not overlook that a good many literary works, of which Chaucer's is one, handles the theme of penitence in one way or another.